

# 伝後伏見院筆歌集残簡

——京極派歌人の贈答歌集——

久保木 秀 夫

要旨 東大史料編纂所蔵写真帳のうち「(伝)後伏見天皇宸翰」(六一三—二〇)と題される一冊は、従来知られていなかった歌集の残簡である。卷子本一軸、もとは列帖装の六半本の零葉とみられる。文献操作によつて、その一紙四面分の料紙三枚の状態にまで復元することが可能である。

そうして得られた復元案から知られる作者は、頼成朝臣(≡伏見院)・中将(≡永福門院)・藤大納言典侍(≡為子)・為兼・中宮大納言の計五名。ほとんどが著名な京極派歌人である。一方、都合三十三首分ある所収歌は、いずれも二首一組の贈答歌であるとおぼしい。贈答歌そのものは他文献には検し得ないが、大変興味深いことに、各々に付された詞書の方が「後撰集」「和泉式部集」「和泉式部統集」の中に見出せるのである。このことなどから当該歌集は、ある時期に伏見院周辺の京極派歌人の間で開かれた、贈答歌を詠み合う類の催しの記録であると考えられる。そしてその贈答歌というのは、彼らの好尚に適った古典作品の詞書を引用し、そこに示されたシチュエーションに基づいて、自由な発想で詠み合つていくという、擬似的・創作的なものであったとみられるのである。

当該歌集の内部徴証から、その開催時期はほぼ正応・永仁年間に限定される。それは岩佐美代子氏によつて、前期京極派の第一次摸索期と定義される重要な時期である。当該歌集はその頃の資料的空白をわずかながらも埋めるものとして、また古典撰取や和歌活動の様相を具体的に示すものとして、位置づけることができそうである。



一

東京大学史料編纂所蔵の写真帳の中に「(伝) 後伏見天皇宸翰」と題される一冊がある(請求番号六一三二—二〇)。従来特に注意されてはこなかったようだが、『東京大学史料編纂所写真帳目録I』<sup>(1)</sup>に「某歌集断簡」と注記されているように、これは歌集の断簡、より正確に言えば歌集の残簡である。しかもまだ知られていない歌集であるらしく、その内容も大変興味深いもののように思われるので、ここに翻刻紹介し、併せて資料的性格についての若干の考察を加えてみることにする。<sup>(2)</sup>

二

最初に翻刻を掲げる。

(見返しより続く)
返し 藤大納言典侍
1 あささりのうきたるそらにまかひなは

(継ぎ目)

我身もしはしたちをくれめや

九月はかりとりのねにそゝの  
かされて人のいてぬるに

頼成朝臣

2 とりのねや心しりけむいまはとて

おきつるのちも秋のひと夜を

かへし 藤大納言典侍

3 心しる鳥のねならばあきの夜の

(綴じ穴)

(折り目)

人めになむつゝむといへりければ

中宮大納言

4 つゝむなる人めよさらはしけくなれ

さてもあひみぬかたにおもはん

返し 藤大納言典侍

5 やへふきのひまをはしゐてもとめすて

しけき人めにことよせんとや

第一紙

右面

第一紙

左面

心さしのほとをなんえしらぬと  
いへりける人に

中将

6 わひはてしそのふしくをわすれてや  
さらに心をしらすとはいふ

かへし 藤大納言典侍

7 なをいさやことの葉こそはあさからね  
そのふしくもけにはみえねは

なを世にありふましきといふ

人に 頼成朝臣

8 されはこそそはまほしけれたれも世に  
さてありふへき物としらねは

返し 中将

(綴じ穴)

(継ぎ目)

第二紙  
右面

(折り目)

9 そなたのそらをなかめてそふる

返し 頼成朝臣

10 いまよりはもしかよは、のたのみゆへ

なかめのそらそあはれそふへき

秋きりのたちわたるつとめて

いとつらければこのたひはかりなん

いふへきといへりければ

頼成朝臣

11 あさきりのそらにまかひてきえねわれ

さてとはれてはあらし身なれは

12 よしみよさらにわれはかはらし

いかてた、ひとたひたいめむ

せんといひたるに

中将

第二紙

左面

(継ぎ目)

13 ひとたひとさこそはやすくおもふとも

なかなきなきとならし物かは

返し 頼成朝臣

14 なか、らんなきはたれもかなしけれと

せめてわひぬる身とはしらすや

かれかたになりになるおとこに

(綴じ穴)

(折り目)

15 のちの世までをいか、たのめむ

おとこのいかにそえまうてこぬ

事といへりければ

中将

16 なにとた、さそとは見てしそのきはを

たかせきならぬせきそゐるらん

返し 頼成朝臣

17 ゆきかよふ心のま、のみちならば

かへらんかたやせきとならまし

第三紙

右面

第三紙

左面

世の中にへしなとおもふころ

為兼卿

18 物にふれてあはれそふかきうき世<sup>を</sup>□

いく程かはおもひたつころ

かへし 頼成朝臣

19 おもひすてむ世はおほかたのあはれよりも

我身のうへそわれはかなしき

雨のふるか<sup>つれ</sup>つれくとなかむるに

むかしあはれなりしことなど

いふ人に 藤大納言典侍

20 君もまたしのは、かたりあはせはや

ゆふへの雨のふかきあはれを

(継ぎ目)

第四紙

右面

(折り目)

(綴じ穴)

返し 中将



21 はるさめのそのふることはかきつくし  
かたりあはすとはれしと思

心かはりたるおとこしはしおもひ  
かはるなどいふに

中将

22 なこりとは心のみこそなりぬれは

なにかいまさらあらためもせん

返し 藤大納言典侍

23 まちたのめけにあらためぬ心ならば

ぬにも 中将

24 すてやらぬたゝひとことのお困れゆへ

まよはむみちのすゑそかなしき

返し 頼成朝臣

25 我のみやまよはむみちのすゑまでも

おくれぬともとならむとすらむ

第四紙

左面

（継ぎ目）

第五紙

右面

さくらの花を人のおりてこれに  
なくさめよとあれは

頼成朝臣

26 うつりやすきためしをみする花にしも

(綴じ穴)

27 あさくなな□そ水くきのあと

としのくれに雪のいみしう

ふるひいひやる

中将

28 ころしもあれいくへの雪にみちたえて

さはりやすさはとしやへたてん

返し 藤大納言典侍

29 とはてわれあるへきものかとしもくれ

雪もいくへのみちうつむとも

うしろめたき心あるをわか心を

(折り目)

第五紙

左面

そへてみてしかな囧いふ人に

頼成朝臣

30 そへて見はあはれそみえんふかくしむ

心のほかはわけぬおもひを

返し 中宮大納言

31 よしやよし心もそへしそへて見は

人のふかさそいと、しられん

しのひてかたらふ人のた、あらは

れにあらはる、をはいか、おもふと

いひたるに 為兼卿

（綴じ穴）

32 みたれはまさるこひの涙も

つれくのつきせぬま、におほゆる

事おほかれは

（継ぎ目）

第六紙

右面

（折り目）

藤大納言典侍

33 いかてくわすれむこ□よなれし世の

しのはれまさることのかすく

返し 頼成朝臣

34 わすられはやすくすつへきなこりかと

さらになしきあはれをそおもふ

世中をえひたすらおもひはなれ

(印)

(花押)

(継ぎ目)

這巻物一軸者  
後伏見院天皇宸翰也

不可有疑者

賞鑑家

古筆了仲(印)

第六紙

左面

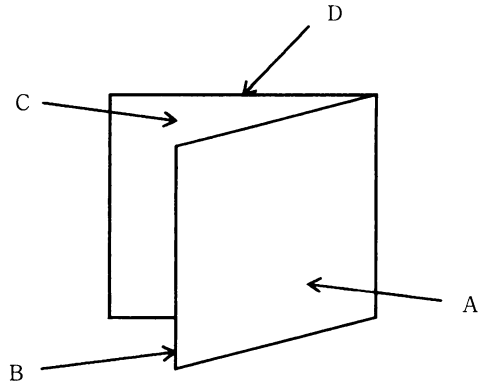
第七紙

※便宜上、私に歌番号を付した。

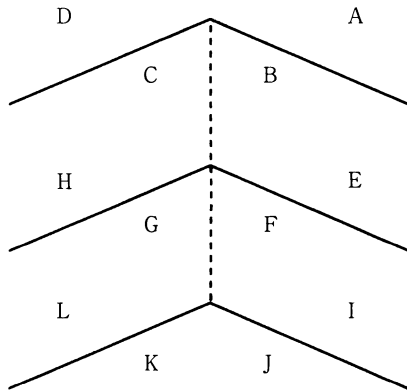
それではまず、写真帳の白黒写真からわかる範囲の書誌を述べておく。当該本は卷子本一軸である。表紙は布表紙で、その左端には無記入の題簽がある。また見返しには、金あるいは銀とおぼしき大小の箔が蒔かれている。見返しに続く本文料紙は素紙であるが、斐紙か楮紙かといった種類まで特定するのは難しい。料紙の枚数は、写真を一瞥したところ、ほぼ正方形大の料紙が十二枚分継がれているように見える。ところがその一枚一枚の続き目の部分を観察してみると、翻刻にも示したように、一箇所おきに綴じ穴の痕が認められることに気づく。また、その正方形大の料紙のサイズだが、写真には原本に重ねる形で測量用のメジャーが写されているところがある。それに基づいて比率計算してみると、料紙一枚分のサイズは縦十五・四cm、横十五・六cm程度、すなわちいわゆる六半本のサイズと大体同じぐらい、ということになる。要するに当該本は、もと列帖装の六半本の残簡を卷子本に改装したものであるらしい、と考えられるわけである。言うまでもなく列帖装は、次掲の図①のような二つ折りにした横長の料紙を、図②の俯瞰図のように数枚重ねて一括りとし、その括りを二つ以上重ねて一冊の本にする。従って当然、列帖装の料紙一枚分には、書写できる面が、例えばA・B・C・Dというように四面分生じることになる。当該本は、そのような列帖装の一紙四面分の料紙が、さらにオモチウラ二枚に剥がされ、一紙二面分となったもの、具体的には図③のような料紙が都合六枚分、横一列に継がれて、卷子本に仕立て直されたものようである。

なお当該本の第七紙目には「這巻物一軸者、後伏見院（天皇宸翰也）、不可有疑者」という古筆了仲の極め書きがある。古筆了仲には初代（元文元年没）・二代目（明治二十四年没）・三代目（大正九年没）の三人がいるが、高田信敬氏<sup>3</sup>

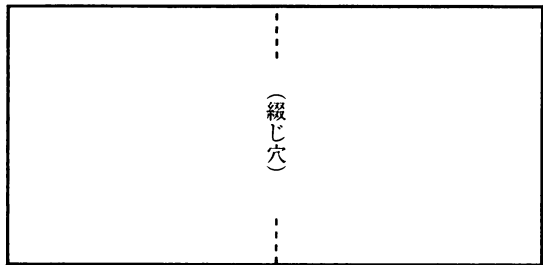
図①



図②



図③



のご教示によれば、当該本のそれは二代目か三代目のどちらかと考えてよいのではないかと、このことである。ちなみに第六紙目と七紙目との継ぎ目には、その了仲によるものとおほしい印と花押とが見られるが、それが三人のうち誰の一致するの点については、いまだ調査が及んでいない。ともあれ二代目もしくは三代目了仲が活動していたのは、ほぼ江戸末期から大正の中頃にかけてであるから、当該本の卷子本への改装時期は、少なくともその頃以前ということにはなりそうである。

ところでその仲は、当該本を後伏見院の宸翰であると極めてい。實際に後伏見院筆であるかどうかはともかく、確かに当該本の筆蹟は、その時代の書風の特徴を備えてはいるようである。おそらく南北朝頃の書写として大過なからう。

さて、次に当該本の内容について、とりあえず大まかに眺めておくと、まず一瞥して、各面に記されているすべての歌が、二首一組の贈答歌であるらしいことに気づく。例えば第一紙と第二紙とでは、2と3の歌、4と5の歌、6と7の歌、9と10の歌が贈答歌となっているし、また1及び8の歌についても、その前後の記述から、もともとは贈答歌だったことが知られる。それは第三紙から第六紙までにおいても変わらない。ひとつひとつ確認はしないが、そこに並んでいる歌のほとんどは、やはり二首一組の贈答歌であるとみてよいように思われる。これらのことから、ひとまず当該本は、二首一組の贈答歌を列記していく内容の歌集だったらしい、と考えることができそうである。

ただ当該本において問題なのは、第一紙から第六紙までの全十二面分の内容が、必ずしも連続しているわけではない、ということである。例えば第一紙右面の最後の行には「心知る鳥のねならば秋の夜の」(3)という上句が見られるが、続く第一紙の左面は、それとはまったく関係ない「人目になむつつむ、といへりければ」という詞書から始まっている。また例えば第三紙を見てみると、右面は「かれ方なりにける男に」という詞書で終わっているが、左面の最初の行には「のちの世までをいかがたのめむ」(15)という、やはり右面とは無関係な下句が記されている。なお、今挙げたふたつの例は、いずれも料紙の折り目の部分に当たっているが、そうではない、料紙の継ぎ目の部分においても、やはり同様の現象を指摘することが可能である。もう本文は示さないが、第二紙の左面から第三紙の右面にかけての部分などは、その一例であると言えよう。

それにしても、一体どうしてこのような、各面同士が繋がらないという問題が生じたのかというと、それ

はひとえに当該本が、もと列帖装の零葉だったということによる。もう一度、前掲の図②をご覧ください。列帖装の冊子本において本文が書き進められていく場合、それはほぼ例外なく、A・B・E・F・Iと続き、J・Kで折り返し、またL・G・H・C・Dと続いていく、といった順序になろうと思われる。従って、その列帖装の括りがほかれ、四面分の料紙一枚だけが取り出された状態になった時、料紙の外側の、例えばAとDや、EとHのような位置関係にある面同士の内容は、決して連続することがない。また内側の、BとC、FとGといった面同士の場合も、唯一JとKのような位置関係を除いては、やはりその内容は続かない、ということになる。このように列帖装の料紙において、見開きの左右の面が連続するということは、非常に稀だと言えるのである。そして当該本はまさに、そうした性格を持つ列帖装の料紙を繋ぎ合わせた本なのだから、折り目の部分にしろ継ぎ目の部分にしろ、それを挟んだ面同士の内容は、どうしても連続しないことの方が多くなってしまいうわけである。

しかしながら、それでは当該本におけるすべての面が、どれひとつとして繋がっていないのかというと、そういうわけでもなさそうである。面同士の続き具合に注意しながら、当該本を読み進めてみたところ、数ヶ所にわたって、内容的に連続してはいないか、と思われる部分に出くわした。まず一ヶ所目は、第一紙の左面と第二紙の右面である。前者は詞書と作者名で終わり、後者は贈答歌そのものから始まっている。その詞書の「こころざしのほどをなん、え知らぬ、といへりける人に」という記述と、6・7の歌、とりわけ6の「侘び果てしそのふしぶしを忘れてやさらに心を知らずとは言ふ」という贈歌とは、表現・内容ともに、実によく対応していると思われる。また二ヶ所目は、第三紙の左面と第四紙の右面である。前者の終わりの「世の中に経じ、など思ふ頃」という詞書と、後者の初めの、作者名に続く18の「ものにあはれぞ深き憂き世<sup>㊦</sup>□いく程かはと思ひ立つ頃」という贈歌、及び19の返歌とは、やはり内容的にうまく繋がっていくようである。それから三ヶ所目は、第五紙の左面と第六紙の右面である。



前者は詞書の途中で終わり、後者は詞書の途中から始まっているが、それらを通して読んでみると、「うしろめたき心あるを、わが心を添へてみてしがな、といふ人に」となつて、文章が問題なく続いていく。またそのように、前者の最後の「わが心を」と、後者の最初の「添へてみてしがな」とを繋げた場合、その詞書は30・31の贈答歌、とりわけ31の「よしやよし心も添へじ添へてみば人の深さぞいとど知られん」という返歌の表現と、より密接に重なり合ってくることもなる。

このように以上の三ヶ所においては、並んだ面同士を続けて読むことで、詞書から始まり返歌に終わる、二首一組の贈答歌がきれいに構成されていく。しかもそれらは、表現的にも内容的にも決して齟齬することがない。その点以上の三ヶ所は、元來連続していたものと考えておそらく間違いないようである。しかし連続していたとなると、今度はそれらの各面が、それでは元々どのような位置関係にあったのか、ということが問題となつてこよう。そこで、以上の三ヶ所における各面同士の続き具合を確認してみると、一見してそのいずれもが、料紙の継ぎ目の部分に当たっているということに気づく。つまり三ヶ所ともに、一紙二面分の料紙の左面から、それとは別の料紙の右面へと続いていっているわけである。ここで前掲の図②を今一度ご参照願いたい。列帖装の冊子本において、面と面とが今述べたとおりの続き方をするのは、まず例外なく、AとB、EとF、もしくは反対側のCとDなどのような、オモテとウラの関係にある場合だけである。どのように想定してみても、それ以外の位置関係にはなり得ないだろうと思われる。そうすると当然問題の三ヶ所も、それらA・BやE・Fなどと同様の位置関係にあった、ということになる。もはや言う必要もなからうが、要するに問題の箇所の各面は、元々同じ料紙のオモテウラだったと考えられるのである。

このことは、当該本を讀解していくに際して、また少なからぬ便宜を与えてくれそうである。以上の三ヶ所のうちどこでもよいのだが、例えば一ヶ所目の場合で言うと、オモテウラの関係にあったのは、第一紙の左面と第二紙の右

面のみではない。それらを含む、第一紙と第二紙そのものが、本来は表裏一枚だったはずである。つまりこの時点で、  
図①②のA・B・C・Dのような、一紙四面分の料紙の状態にまで復元されたことになる。もともと第一紙と第二紙のどちらが内側で、どちらが外側だったのか、という点についてはわからない。ここでは仮に、第一紙の左面をAの面、第二紙の右面をBの面としておくが、さてそうすると自ずから、第二紙の左面がCの面、第一紙の右面がDの面、というふうに当てはまってくるだろう。そしてそのCとDとは、繰り返すが列帖装の特性として必ず連続するのだから、当然それらと同じ位置関係にある第二紙の左面と、第一紙の右面もまた、まず間違いなく連続しているはずなのである。そこで実際に、それら二つの面を繋ぎ合わせてみると、

(前略)

秋きりのたちわたるつとめて

いとつられはこのたひはかりなん

いふへきといへりければ

頼成朝臣

11あさきりのそらにまかひてきえねわれ

さてとはれてはあらし身なれは

返し

藤大納言典侍

1 あさきりのうきたるそらにまかひなは  
我身もしはしたちをくれめや

(後略)

のように、11の歌に続いて1の歌がくることになる。その11の歌と1の歌とが、表現的にも内容的にも通じ合っていることは一読して明らかだろう。その点確かにこの二首は、本来一組の贈答歌だつたとみてよさそうに思われる。このように、現在的位置的には離れてしまっている第二紙の左面と、第一紙の右面も、元々はオモテウラ一葉で、形態・内容ともに連続していたものらしい、と判断することができるのであるが、もちろんそれは、右のふたつの面のみに限った話ではない。それと同じ位置関係にある第四紙左面と第三紙右面、また第六紙左面と第五紙右面も、やはり本来はオモテウラの関係にあつたとみなせるはずだろう。そこで今の場合と同様に、それぞれの面を繋げてみせると、まず第四紙左面と第三紙右面とは、

(前略)

心かはりたるおとこしはしおもひ  
かはるなといふに

中将

22 なこりとは心のみこそなりぬれは  
なにかいまさらあらためもせん

返し 藤大納言典侍

23 まちたのめけにあらためぬ心ならば

12 よしみよさらにわれはかはらし

(後略)

のようになり、また第六紙左面と第五紙右面とは、

(前略)

世中をえひたすらおもひはなれ

ぬにも 中将

24 すてやらぬた、ひとことあ困れゆへ  
まよはむみちのすゑそかなしき

返し 頼成朝臣

25 我のみやまよはむみちのすゑまでも

おくれぬともとならむとすらむ

（後略）

のようになる。詳しくはもう触れないが、いずれの場合も確かにその本文は、連続していると考えてよいようである。ここで一旦、以上の考察を整理しておくことにしよう。まず当該本のうち、第一紙・第三紙・第五紙の各左面と、第二紙・第四紙・第六紙の各右面とが、本文的に連続しているらしいことを述べた。次にそのことから、第一紙と第二紙、第三紙と第四紙、第五紙と第六紙とが、それぞれオモテウラの関係にあつたらしいことを指摘した。加えてさらにそのことから、位置的に離れている第二紙・第四紙・第六紙の各左面と、第一紙・第三紙・第五紙の各右面も、実は続けて読むことができるらしい、ということを示した。一見、全十二面ある各面同士が、内容的に繋がっていないような印象を受ける当該本だが、以上の考察により、少なくともその六ヶ所においては、それぞれ二面ずつを一続きのものとして扱うことができるようになったわけである。

ところがその六ヶ所以外に、実はもう一ヶ所だけ、本文的に続いているのではないか、と思われる部分がある。それは第四紙の右面と、同じ第四紙の左面とである。うち右面は、20の「君もまた偲ばば語り合はせばや夕べの雨の深きあはれを」という贈歌で終わり、左面は、21の「春雨のそのふるごとはかき尽くし語り合はすと晴れじとぞ思ふ」という返歌で始まっている。この二首が、本来一組の贈答歌であつたことは、表現面・内容面から考えて、やはり間違いないところだろう。その点、この第四紙の右面と左面もまた、以上の六ヶ所と同様に、本来連続する面同士であつたとみなしてよさそうである。ただ今回の場合、これまでの例と違うのは、その繋がっている面同士が、別々の料紙にまたがっているのではなく、綴じ穴のある部分を挟んで、第四紙という同じ料紙の中にある、ということである。

先程、列帖装の料紙において、見開きの左右の面が連続することは非常に稀だと説明したが、しかしそれには一ヶ所だけ例外があるということも述べた。それは列帖装の括りのうち、一番内側にある料紙の、さらに内側を向いた面同士、具体的には図②のうち、JとKのような位置関係にある面同士の場合である。ここに書かれた本文だけは、よほどの例外がない限り、JからKへと必ず繋がっていくはずだろう。問題の第四紙は、つまりもともと、そのJ・Kと同じような位置づけにある料紙だったとみられるわけである。具体的には、第四紙の右面がJ、左面がKにそれぞれ該当しよう。とすると自然に、第四紙とオモテウラの関係にあった第三紙の左面がIの面、また右面がLの面に当てはまっていくことにもなる。このように、二段目の第三紙と第四紙とは、冊子本の状態時、括りの一番内側にあった料紙と推測されるのである。

そうした場合、次に考えるべき問題は、その第三紙と第四紙の組み合わせの料紙に、第一紙と第二紙の料紙、及び第五紙と第六紙の料紙とが、直接重なっていかないだろうか、ということである。残る二枚のそれらの料紙が、それぞれE・F・G・Hの料紙や、A・B・C・Dの料紙のような位置に綴じられていたとすると、当該本の十二面は、結局すべてが連続していた、ということになるのだが、しかしさすがに、そこまでうまくはいかないようだ。料紙同士の重なり具合をいろいろ想定してみたが、残念ながららどの組み合わせも本文的に繋がることはなかった。当該本が制作された時点で、すでに本当にバラバラの位置の料紙しか残ってはいなかった、ということのようである。ともあれ、十二面すべてというのは不可能だったが、少なくとも第三紙と第四紙とに関して、I・J・K・Lの料紙と同様に、第三紙の左面・第四紙の右面・第四紙の左面・第三紙の右面という順番で、その四面分を続けて読むことができるようになったわけである。

四

以上の考察に基づく本文の復元案を次に掲げる。現状では結局、五つの歌群に分けざるを得ないことになる。歌群同士の前後関係はわからないので、とりあえずは継がれている順番に従っておいた。また本文の判読不能部分、及び誤写とおぼしき部分には、一部校訂案を傍書してみた(校訂案は岩佐美代子氏からご教示いただいた)。加えて、ここで新たに歌番号を振り直した。翻刻において付した当初の番号も、参考までに下に( )で示したが、以下の考察ではその旧番号ではなく、新番号の方を使用していくことにする。

〈第一歌群〉

人めになむつゝむといへりければ

中宮大納言

1 つゝむなる人めよさらはしけくなれさてもあひみぬかたにおもはん (4)

返し

藤大納言典侍

2 やへふきのひまをはしゐてもとめすてしけき人めにことよせんとや (5)

心さしのほとをなんえしらぬといへりける人に

中将

3 わひはてしそのふしくをわすれてやさらに心をしらすとはいふ (6)

かへし

藤大納言典侍

4 なをいさやことの葉こそはあさからねそのふしくもけにはみえねは (7)

なを世にありふましきといふ人に

頼成朝臣

5 されはこそそはまほしけれたれも世にさてありふへき物としらねは (8)

返し

中将

〈第二歌群〉

6 そなたのそらをなかめてそふる (9)

返し

頼成朝臣

7 いまよりはもしかよは、のたのみゆへなかめのそらそあはれそふへき (10)

秋きりのたちわたるつとめていとつらければこのたひはかりなんいふへきといへりければ

頼成朝臣

8 あさきりのそらにまかひてきえねわれさてとはれてはあらし身なれは (11)

返し

藤大納言典侍

9 あさきりのうきたるそらにまかひなは我身もしはしたちをくれめや (1)

九月はかりとりのねにそ、のかされて人のいてぬるに

頼成朝臣

10 とりのねや心しりけむいまはとておきつるのちも秋のひと夜を (2)

かへし

藤大納言典侍

11 心しる鳥のねならはあきの夜の (3)

〈第三歌群〉



12のちの世までをいかゝたのめむ（15）

おとこのいかにそえまうてこぬ事といへりければ

中将

13なにとたゝさそとは見てしそのきはをたかせきならぬせきそあるらん（16）

返し

頼成朝臣

14ゆきかよふ心のまゝのみちならはかへらんかたやせきとならまし（17）

世の中にへしなとおもふころ

為兼卿

15物にふれてあはれそふかきうき世を□はいく程かはおもひたつころ（18）

かへし

頼成朝臣

16おもひすてむ世はおほかたのあはれよりも我身のうへそわれはかなしき（19）

雨のふるはかつれくとなかむるにむかしあはれなりしことなといふ人に

藤大納言典侍

17君もまたしのはゝかたりあはせはやゆふへの雨のふかきあはれを（20）

返し

中将

18はるさめのそのふることはかきつくしかたりあはすもとはれしとぞ思（21）

心かはりたるおとこしはしおもひかはるなといふに

中将

19なこりとは心のみこそなりぬれはなにかいまさらあらためもせん（22）

返し

藤大納言典侍

20 まちたのめけにあらためぬ心ならばよしみよさらにわれはかはらし(上句23・下句12)  
いかてた、ひとたひたいめむせんといひたるに

中将

21 ひとたひとさこそはやすくおもふともなかなけきとならし物かは(13)

返し

頼成朝臣

22 なか、らんなけきはたれもかなしけれとせめてわひぬる身とはしらすや(14)  
かれかたになりにおけるおとこに

〈第四歌群〉

23 あさくななしそ水くきのあと(27)

としのくれに雪のいみしうふるひいひやる

中将

24 ころしもあれいくへの雪にみちたえてさはりやすさはとしやへたてん(28)

返し

藤大納言典侍

25 とはてわれあるへきものかとしもくれ雪もいくへのみちうつむとも(29)

うしろめたき心あるをわか心をそへてみてしかな<sup>□</sup>いふ人に

頼成朝臣

26 そへて見はあはれそみえんふかくしむ心のほかはわけぬおもひを(30)

返し

中宮大納言

27 よしやよし心もそへしそへて見は人のふかさそいと、しられん (31)

しのひてかたらふ人のた、あらはれにあらはるゝをはいか、おもふといひたるに

為兼卿

〈第五歌群〉

28 みたれはまさるこひの涙も (32)

つれくつきせぬま、におほゆる事おほかれは

藤大納言典侍

29 いかてくわすれむこ□よなれし世のしのはれまさることのかすく (33)

返し

頼成朝臣

30 わすられはやすくすつへきなこりかとさらになしきあはれをそおもふ (34)

世中をえひたすらおもひはなれぬにも 中将

31 すてやらぬた、ひとことのお固れゆへまよはむみちのすゑそかなしき (24)

返し

頼成朝臣

32 我のみやまよはむみちのすゑまでもおくれぬともとならむとすらむ (25)

さくらの花を人のおりてこれになくさめよとあれは

頼成朝臣

33 うつりやすきためしをみする花にしも (26)

それではあらためて、当該本の内容を検討していくことにする。まず当該本に見られる作者とその歌数とを整理してみると、次のようになる。

頼成朝臣……………	十一首	(5・7・8・10・14・16・22・26・30・32・33)
中将……………	八首	(3・5の次・13・18・19・21・24・31)
藤大納言典侍……………	八首	(2・4・9・11・17・20・25・29)
為兼卿……………	二首	(15・27の次)
中宮大納言……………	二首	(1・27)
作者不明……………	四首	(6・12・23・28)

「頼成朝臣」なる人物が一番多くて十一首、続いて「中将」と「藤大納言典侍」とがそれぞれ八首ずつ、「為兼卿」と「中宮大納言」とがそれぞれ二首ずつである。ちなみに第二歌群から第五歌群までの冒頭の四首は、いずれも作者名表記と上句とを欠いているので、ここでは一応「作者不明」としておいた。さて、これら五人の作者の中に「為兼卿」すなわち京極為兼と、「藤大納言典侍」すなわち為兼の姉の為子とが含まれている点、当該本が京極派に関わる歌集であるらしいことは容易に推察されるだろう。そこで、これまでに知られている京極派関連の資料を調べてみたところ、永仁五年（一二九七）八月十五夜に催されたとされる歌合の中に、当該本の作者のほぼ全員の名を見出すことができた。その歌合では「左近権中将藤原朝臣頼成」と「中将」とが左方に、また「中宮大納言」と「藤大納言典

侍」とが右方に、それぞれ作者として加わっている。唯一為兼の名前だけ見当たらないが、彼は前年の永仁四年（一二九六）五月十五日に、讒言によって権中納言を辞しており、以後永仁六年（一二九八）正月十三日に佐渡に流されるまで、ずっと籠居の身にあつたので、不参加だつたのはそのためだろうと従来から言われている。ただし井上宗雄氏によつてまた、やはり為兼も、表には出ない形で指導したりはしていたのだろう、と推測されているので、結局当該本の作者はすべて、この歌合に関わつていたらしい、と考えられることになる。ところで、この永仁五年歌合における「頼成朝臣」については、実は伏見院の隱名であるということが、すでに井上氏や岩佐美代子氏によつて指摘されている。また「中將」というのがほかならぬ永福門院の隱名であることも、早く谷宏氏が明らかにされたところである。その点、おそらくは当該本における「頼成朝臣」と「中將」も、永仁五年歌合の場合と同様、伏見院と永福門院の隱名であるとしてよいのだろう。すなわち当該本は、伏見院・永福門院・為兼・為子という、まさに京極派の中心メンバーと呼ぶべき人々の歌を収めた歌集であつた、とみられるわけである。

ただしそれでは当該歌集が、一体どのような種類の歌集なのかというと、復元案を一瞥する限りにおいては、なかなか即答しかねるのである。例えば仮に、伏見院周辺の日々の詠歌を記録した、いわゆる集団の歌集のようなものかと考えてみても、所収歌がすべて二首一組の贈答歌であるという点、かなりの不審が残りそうである。また仮に、何らかの撰集の類だつたのかと見当をつけてみても、作者の顔ぶれが、組み合わせはさまざまながらも結局五人に限られる点、既存の贈答歌を集めただけの歌集であるとも考えにくい。いやそうではなく、ある時京極派の歌人らによつて、贈答歌を詠み合うといった趣向の催しが開かれていたのではないか、当該歌集はその際の詠歌の記録ではなからうか、などと推測してみても、都合二十一組分あるとおぼしい贈答歌のほとんどに、詠作事情を示す類の詞書が付されているのだから、やはりそれぞれの歌は同時期ではなく、別々の折に詠まれたものだとは判断せざるを得ないだろう。

このように当該歌集は、一見極めて把握しづらい性格のように受け取れるのである。

そこで問題解決の糸口を求め、それぞれの贈答歌の他出状況を調査してみたところ、実に注目すべき結果を得ることができた。もつとも他出状況と言っても、当該歌集に収められている三十三首分の歌そのものが、他文献に見出せるといふことではない。「新編国歌大観」「私家集大成」「群書類従」などに加えて、先学による伏見院・永福門院・為兼の和歌集成をも参照してみたが、当該歌集と一致する歌は、それらの中には一首たりとも見られなかった。ところが大変興味深いことに、当該歌集においては、歌ではなくて詞書の方が、他文献に見出せるのである。具体的に、一覧表にして次に掲げよう。

当 該 歌 集

他 文 献

① 1—2 (第一歌群冒頭)

(前欠カ) 人めになむつゝむといへりければ

中宮大納言

つゝむなる人めよさらはしけくなれさてもあひみぬ  
かたにおもはん

返し

藤大納言典侍

やへふきのひまをはしゐてもとめすてしけき人めに  
ことよせんとや

【後撰集】

心ざしをばあはれと思へど、人目になんつつむ、  
と言ひて侍りければ (読人不知)

あふばかりなくてのみふるわが恋を人目にかくるこ  
とのわびしさ (卷十四・恋六・一〇一八)

② 3—4

心ざしのほとをなんえしらぬといへりける人に

中将

わひはてしそのふしくをわすれてやさらに心をし  
らすとはいふ

かへし

藤大納言典侍

なをいさやことの葉こそはあさからねそのふしく  
もけにはみえねは

③ 5—5の次 (第一歌群末尾)

なを世にありふましきといふ人に

頼成朝臣

されはこそそはまほしけれたれも世にさてありふへ  
き物としらねは

返し

中将

(以下欠)

『後撰集』

女のもとより、心ざしのほどをなんえ知らぬ、

と言へりければ

藤原興風

わが恋を知らんと思はば田子の浦に立つらん浪の数  
を数へよ (卷十・恋二・六三〇)

『興風集』

女のもとより、心ざしのほどをなむ知らぬ、と

言へりければ

わが恋を知らんとならば田子の浦に立つ白波の数を  
数へよ (一七三)

『和泉式部集』

なを世にもあり果つましきことの給はすれば

呉竹のよよのふること思ほゆる昔語りは君のみぞせ  
ん (一四二二)

④ 8—9

秋ぎりのたちわたるつとめていとつらければこ  
のたひはかりなんいふへきといへりければ

頼成朝臣

あさきりのそらにまかひてきえねわれさてとはれて  
はあらし身なれは

返し

藤大納言典侍

あさきりのうきたるそらにまかひなは我身もしはし  
たちをくれめや

⑤ 10—11 (第二歌群末尾)

九月はかりとりのねにそゝのかされて人のいて  
ぬるに

頼成朝臣

とりのねやしりけむいまはとておきつるのちも秋  
のひと夜を

かへし

藤大納言典侍

心しる鳥のねならばあきの夜の(以下欠)

〔後撰集〕

秋霧の立ち渡るつとめて、いとつらければ、こ  
のたひばかりなん言ふべきといひたりければ

伊勢

秋とてや今はかぎりの立ちぬらん思ひにあへぬもの  
ならなくに  
(卷十二・恋四・八二四)

〔和泉式部集〕

九月ばかり、鳥のねにそそのかされて、人の出  
でぬるに

人はゆき霧は籬に立ちどまりさも中空にながめつる  
かな  
(I—181)

〔和泉式部統集〕

九月ばかり、鳥の声におどろかされて、人の出



⑥ 13  
— 14

おとこのいかにそえまうてこぬ事といへりけれ

は 中將

なにとたゝさそとは見てしそのきはをたかせきなら

ぬせきそゐるらん

返し 頼成朝臣

ゆきかよふ心のまゝのみちならばかへらんかたやせ

きとならまし

⑦ 15  
— 16

世の中にへしなとおもふころ 為兼卿

物にふれてあはれそふかきうき世を□はいく程かほと

おもひたつころ

かへし 頼成朝臣

でぬるに

人はゆき霧は籬に立ちどまりさも中空にながめつる

かな (II 四一八)

『後撰集』

男の、いかにぞ、えまうでこぬこと、と言ひて

侍りければ 読人不知

こずやあらんきやせんとのみ河岸の松の心を思ひや

らなん (卷十三・恋五・九三八)

『和泉式部統集』

世の中に経じなど思ふころ、幼き子どものある

をみて

憂き世をばいとひながらもいかでかはこのよのこと

を思ひ捨つべき (II 三一一)

おもひすてむ世はおほかたのあはれよりも我身のうへそわれはかなしき

⑧ 17—18

雨のふるかつれ(目カ)くとなかむるにむかしあはれ

なりしことなといふ人に

藤大納言典侍

君もまたしのは、かたりあはせはやゆふへの雨のふ

かきあはれを

返し

中将

はるさめのそのふることはかきつくしかたりあはす

とはれ(もカ)しとぞ思

⑨ 19—20

心かはりたるおとしはしおもひかはるなとい

ふに

中将

なこりとは心のみこそなりぬれはなにかいまさらあ

らためもせん

返し

藤大納言典侍

『和泉式部集』

雨の降る日、つれづれとながむるに、昔あはれ

なりしことなど言ひたる人に

おぼつかなたれぞ昔をかけたるはふるに身を知る雨

か涙か

(I二〇四)

『和泉式部集』

心かはりたる男の、ま(ママ)くらし(ママ)ばし思ひかはるな、

となん言ふに

いさやまだかはりも知らず今こそは人の心を見ても

ならはめ

(I二二一)

まちたのめけにあらためぬ心ならばよしよさらに  
われはかはらし

⑩ 21—22

いかでたゝひとたひたいむせんといひたるに

中将

ひとたひとさこそはやすくおもふともなかなき  
とならし物かは

返し

頼成朝臣

なか、らんなきはたれもかなしけれとせめてわひ  
ぬる身とはしらすや

⑪ 22の次 (第三歌群末尾)

かれかたになりにおけるおとこに (以下欠)

『玉葉集』

いかでただ一たび対面せむ、と言ひたる人に

和泉式部

世々を経て我やはものを思ふべきただ一たびのあふ  
ことにより (巻九・恋一・一二八七)

『和泉式部集』

いかなる人にか、いかでただ一たび対面せん、  
と言ひたるに

世々を経て我やはものを思ふべきただ一たびのあふ  
ことにより (一四九九)

『後撰集』

かれがたになりにおける男のもとに、装束調じて  
送れりけるに、かかるからにうとき心地なんす  
る、と言へりければ 小野遠興が女

⑫ 24—25

としのくれに雪のいみじうふるひいひやる

中将

ころしもあれいくへの雪にみちたえてさはりやすさはとしやへたてん

返し

藤大納言典侍

とはてわれあるへきものかとしもくれ雪もいくへのみちうつむとも

⑬ 26—27

うしろめたき心あるをわか心をそへてみてしか

な<sub>田</sub>いふ人に

頼成朝臣

そへて見はあはれそみえんふかくしむ心のほかはわけぬおもひを

返し

中宮大納言

つらからぬなかにあるこそうとしと言へ隔て果ててしきぬにやはあらぬ  
(卷十一・恋三・七三四)

『和泉式部集』

冬の果てつ方、雪のいみじう降る日、人やる

ふりはへてたれはたきなんふみつくる跡見まほしき雪の上かな  
(一五二八)

『和泉式部集』

うしろめたな心あるを、わが心そへて見てしかな、

と言ひたるに

ひきかへて心のうちはなりぬともこころみならば心みてまし  
(一八三三)

よしやよし心もそへしそへて見は人のふかさそいと  
しられん

⑭ 27の次 (第四歌群末尾)

しのひてかたらふ人のたゝあらはれにあらはる  
ゝをはいかゝおもふといひたるに (以下欠)

⑮ 29—30

つれくのつきせぬまゝにおほゆる事おほかれ  
は 藤大納言典侍

いかでくわすれむこ□よなれし世のしのはれまさ  
ることのかすく

返し 頼成朝臣

わすられはやすくすつへきなこりかとさらになし  
きあはれをそおもふ

【和泉式部集】

しのびてあたらひたる人の、ただあらはれにあ  
らはるるを、かかるをばいかが思ふ、と人の言  
ひたるに、八月ばかりに

風をいたみみ下葉の上になりしよりうらみてものを  
思ふ秋菽 (一七一五)

【和泉式部続集】

つれづれの尽きせぬままに、おほゆる事を書き  
集めたる、歌にこそにたれ。昼しのぶ、夕のな  
がめ、宵の思ひ、夜中の寝覚め、暁の恋、これ  
を書き分けたる

昼しのぶ  
昼しのぶことだにことはなかりせば日を経てものは  
思はざらまし (II 一一二)

世中をえひたすらおもひはなれぬにも

中將

すてやらぬた、ひとことのおほれゆへまよはむみち  
のすゑそかなしき

返し

頼成朝臣

我のみやまよはむみちのすゑまでもおくれぬともと  
ならむとすらむ

⑰ 33 (第五歌群末尾)

さくらの花を人のおりてこれになくさめよとあ

れは

頼成朝臣

うつりやすきためしをみする花にしも (以下欠)

〔和泉式部統集〕

世の中をひたすらにえ思ひ離れぬやすらひに

われすまばまた浮き雲・かかりなん吉野の山も名の  
みこそあらめ (II 一〇〇)

〔和泉式部統集〕

南院の梅花を、人のもとより、これ見てなぐさ

めよとあるに

世に経れど君に遅れて折る花は匂ひて見えず墨染に  
して (II 四八)

具体的にいくつか取り上げてみると、例えば①の詞書は「人目になむつつむ、と言へりければ」というものだが、それは『後撰集』の「心ざしをばあはれと思へど、人目になむつつむ、と言ひて侍りければ」という詞書の後半部と

ほぼ完全に一致する。また④の「秋霧の立ち渡るつとめて、いとつらければ、このたびばかりなむ言ふべき、と言へりければ」という詞書も、その下段に示した『後撰集』の詞書と、若干の言い回しの違いを除いてほとんど同文であると言えよう。それから⑧の「雨の降るか、つれづれとながむるに、昔あはれなりしことなど言ふ人に」という詞書は、『和泉式部正集』に見られる「雨の降る日、つれづれとながむるに、昔あはれなりしことなど言ひたる人に」という詞書と大略同じだし、⑦の「世の中に経じなど思ふ頃」という詞書は、『和泉式部統集』の「世の中に経じなど思ふ頃、幼き子供のあるを見て」という詞書の前半部と合致する。このように当該歌集の詞書を調べていくと、必ず『後撰集』『和泉式部正集』『和泉式部統集』のいずれかの中に見出すことができるのである。どういふことかと言うと、要するに当該歌集の詞書は、それら先行する古典作品からの引用らしい、とみられるわけである。

このことよって当該歌集の性格もようやく判明する。まず所収歌がすべて二首一組の贈答歌であるという点、また作者が伏見院以下数名に限られているという点、やはりおそらくある時期に、伏見院周辺の京極派歌人の間で、互いに贈答歌を詠み合う類の催しがあったと想定すべきである。その際の詠歌の記録が、すなわち当該歌集であるのだろう。そしてその贈答歌というのは、古典作品の詞書を引用し、そこに示されたシチュエーションに基づいて、自由な発想で詠み合っていくという、擬似的・創作的なものであったとみられるのである。

ここでもう少し詳しく、当該歌集の詞書と、出典とおぼしき文献との関係をおさえておきたい。今し方も触れたように、当該歌集の詞書はすべて『後撰集』『和泉式部正集』『和泉式部統集』のいずれかの中に見出せる。そのうち②は『後撰集』のほか『興風集』に、また⑤は『正集』と『統集』の両方に見えるが、本文的にはわずかながらも、それぞれ『後撰集』及び『正集』の方に近いようである。それから⑩は『正集』以外に『玉葉集』にも見られるが、のちほど詳しく述べるように、当該歌集の成立は『玉葉集』成立以前と考えられるので、ここは除外して差し支えない。

そうすると結局、①②④⑥⑪の五例が『後撰集』、③⑤⑧⑨⑩⑫⑬⑭の八例が『正集』、⑦⑮⑯⑰の四例が『統集』に、それぞれ一致していることになる。もつとも一言一句、完全に一致する例というのは非常に稀で、ほとんどの場合、言い回しや表現などに何らかの異同が存在する。それらの中には、引用に際し意図的に手が加えられたものなども、あるいはあるのかもしれないが、当時流布していた本文の問題なども絡んでくるので、確実なことは現時点ではわからない。ともあれ当該歌集の詞書が、その頃伝わっていた『後撰集』及び和泉式部の家集から引用されたものであること自体は、疑えないように思われる。

しかし、それにしてもなぜ『後撰集』であり、和泉式部の家集なのかと言うと、まず和泉式部に関しては、早く服部喜美子氏が指摘されているように<sup>(9)</sup>、十三代集中とりわけ『玉葉集』に多く採られているという事実がある。具体的には次の一覧表から見取れよう。

入集数	総歌数	歌集名
14	1374	新 勅 撰
16	1371	続 後 撰
3	1915	続 古 今
6	1459	続 拾 遺
0	1607	新 後 撰
<b>34</b>	<b>2800</b>	<b>玉 葉</b>
7	2143	続 千 載
5	1353	続 後 拾
8	2211	風 雅
5	2365	新 千 載
4	1920	新 拾 遺
4	1554	新 後 拾
3	2144	新 続 古



勅撰集同士の総歌数の違いを差し引いても、入集数三十四首という歌数は、同時代の二条派による勅撰集と較べてかなりの好待遇だと言えるだろう。また黒岩三由里氏によると、『玉葉集』内部においても、その入集数は他の古典歌人の比ではなく、それどころか京極派の主要歌人に肩を並べるほどだという。<sup>(10)</sup>京極派歌人の間で、和泉式部に対する評価の高かつたらしいことが、これらのことから窺えようかと思われる。

それから『後撰集』の方だが、『忠光卿記』康安元年（一三六二）六月六日条には、それに関する大変興味深い記事が見られる。

六日（略）伏見院宸筆三代集、古今者被遣閑東了、二代集裏被摺写草子也涅槃經、銘可被染宸翰之由、去去年歟、自法皇被申之、此間閑可有御結縁之由被申云々、一合納数状、予依仰拜見、非凡眼之処及、打雲井紙也、歌道事御執心無比類、子細等委細被申之、道事被申置花園院並永福門院、此三代集被預申永福門院云々、凡歌道不過三代集、三代集内後撰集殊被執思食之由被仰也、此風体衰微時節者、可被成灰燼之由ナト被申請云々、

これは伏見院の歌道執心のほどを示すものとして、従来よく知られている資料である。その内容については、すでに井上氏と岩佐氏の詳しい考察があるので、今は要点のみを述べておく。すなわちここには、歌道のことは花園院と永福門院に申し置くこと、また伏見院宸筆の三代集は永福門院に預け置くこと、そして傍線部であるが、歌道においては三代集を最重要古典とし、中でも『後撰集』を愛すること、『後撰集』の風体が衰微するような時は灰燼とすべきこと、という伏見院の訓示とでも言うべきものが記されているのである。岩佐氏は、最後のこの『後撰集』に関する条と、伏見院の和歌表現、及び人格性とを結び付けて、その歌人としての指向性を明らかにしておられるが、ともあれこの『忠光卿記』の記事からは、伏見院が『後撰集』に限りない愛着を持っていたらしいことが窺えよう。当該歌集で『後撰集』の詞書が取り上げられているのは、従って、伏見院のそのような好尚の顕れだろうと考えることが

できそうである。

さて、当該歌集の詞書にはもうひとつ、それらが引用されていく順番についての問題がある。各贈答歌における詞書と作者の組み合わせとを一覧表にしてみると、次のとおりとなる。

第三			第二			第一			歌群	
17   18	15   16	13   14	?   12	10   11	8   9	6   7	5   ?	3   4	1   2	歌番号
和泉正集(二〇四)			後撰集(九三八)	和泉正集(一八一)			和泉正集(四二二)			詞書出典(歌番号)
藤大納言典侍			為兼卿	頼成朝臣			頼成朝臣			贈歌作者
中将			不明	藤大納言典侍			藤大納言典侍			返歌作者

第五		第四								
33   ?	31   32	29   30	?   28	27 の次	26   27	24   25	?   23	22 の次	21   22	19   20
和泉統集（四八）	和泉統集（一〇〇）	和泉統集（一一二）	不明	和泉正集（七二五）	和泉正集（八三三）	和泉正集（五二八）	不明	後撰集（七三四）	和泉正集（四九九）	和泉正集（二一一）
頼成朝臣	中将	藤大納言典侍	不明	為兼卿	頼成朝臣	中将	不明	不明	中将	中将
不明	頼成朝臣	頼成朝臣	不明	不明	中宮大納言	藤大納言典侍	不明	不明	頼成朝臣	藤大納言典侍

まず詞書出典の欄から確認していくと、第一歌群から第三歌群までは、問題の三集がまさに混在している様子である。一方、第四歌群と第五歌群は、それぞれ一応『正集』と『統集』という同一作品だけだまどまっているようだが、しかしその詞書の順番となると、少なくとも家集内部の歌番号どおりではなく、かといってそれ以外の法則性も特に見出すことができない。このように詞書の引用される順番というのは、いずれの歌群でも一定してはいないとおぼし

く、つまりはほとんどバラバラであるらしいのである。これをどのように考えればよいのか、実は現時点では明快な答えを持ち合わせていないのだが、例えばまったくの憶測ながら、当該歌集の贈答歌を、探題和歌の一種だったとみているのはどうだろうか。飛鳥井雅有の『春の深山路』などからは、春宮時代の伏見院が、探題の当座歌会をかなり好んでいたらしい様子が窺えるし、<sup>(12)</sup>また小林守氏によれば、その後も伏見院は、三百首や千首といった大規模の探題和歌を主催していたとのことなので、当該歌集がそうであったという可能性も、皆無というわけではなさそうである。もちろんその場合は、歌題の代わりに詞書が、くじのように引かれていたことになる。ともあれこのように想定してみれば、詞書の順番に規則性が認められないという問題も、贈答歌ごとにランダムに選ばれていた結果だったということ、それなりに説明することができるだろう。

なおついでに触れておくと、当該歌集のもとになった、贈答歌を詠み合う趣向の催しというのは、萩谷朴氏が説かれるところの問答体の歌合、具体的には『堀河院艶書合』の、

内にて、殿上の人人歌よむと聞こゆるに、宮づかへ人のもとに懸想の歌よみてやれと仰せ言にて。

大納言公実

おもひあまりいかで洩らさむ奥山の岩かきこむる谷の下水(一)

返し

周防内侍

いかなれば音にのみ聞く山河の浅きにしもは心よすらむ(二)

のような形式に近いものだったと考えた方がわかりやすいのではなからうか。また前掲の表の、今度は作者の欄を見ていくと、先の詞書と同様に、やはりその順番や組み合わせが一定していないことが知られる。このことについても、萩谷氏が探番の歌合とされたもの、例えば『山家五番歌合』の、

山家五番歌合 天永三年四月晦日 歌人不分左右当座探得之

題 卯花 野草 郭公 五月雨 寄衣恋

作者 中宮亮藤仲実 左近衛中将源師時 木工頭同俊頼 皇后宮権亮同頭国 左少弁同雅兼

少納言藤定通 前和泉守藤道経 木工助藤敦隆 阿闍梨大法師隆源 琳賢法師

のように、歌人を左右に分かたずに、番ごとにくじを引いて、順番と組み合わせとを決定させていく形式だったと捉えてみると、納得しやすいかと思われる。本稿では、最初に当該本を目にした時の印象から、一応副題を「京極派歌人の贈答歌集」としておいたが、それよりも以上のように、探題探番の間答歌合だったとみた方が、あるいは本質に適っているのかもしれない。そのことを含め、今後当該歌集をどのように呼んでいけばよいのか、現在なお考えあぐねているところである。諸氏の名案を乞う次第である。

## 六

それでは最後に、その贈答歌を詠み合う催しが開かれた時期について考えてみたい。一般的にこのような場合、開催時期と、歌がまとめられた時期とは、大体同じか、そうでなくても近接しているはずだろうから、結局その答えを得るには、当該歌集の記述を検討すればよい、ということになる。そうするとまず目につくのは「為兼卿」という作者名表記である。為兼がそのように「卿」を付されて呼ばれ得るのは、彼が参議に任じられた、正応二年(一一八九)正月十三日(「公卿輔任」同年条)以降のことと考えられる。次に「藤大納言典侍」だが、岩佐氏によると、為子がそう称するようになったのは、ほぼ正応二年(一一八九)四月二十五日以降、同三年(一二九〇)九月十三日以前の

ある時期からだということである。<sup>(15)</sup>それから作者のうちのもう一人、中宮大納言についてであるが、別府節子氏のご教示によれば、彼女は西園寺実顕女で、のち実兼養女になった女性であるという。しかし詳しい経歴はなお不明。先の永仁五年の歌合で右方の筆頭作者を務めていた点は注目されるが、そのほかの和歌活動としては、正応三年（一二九〇）九月十三夜に催された和歌会に、

（詠三首和歌）

（夕月）

中宮大納言

風のおとの吹きのみ増る哀より月にながめのうつる暮かな（二〇）

（暁月）

いとど又哀そふ夜のけしきかな秋もくれゆく有明の影（二一）

（夜恋）

つくづくと一人おきぬて更くる夜の心のうちを思ひだにやれ（二二）

のように出詠したことぐらいしか、現在のところは確認できないようである。ただしいずれの催しも、永福門院の中宮時代であるという点、「中宮大納言」と呼ばれる彼女が、その頃の永福門院付きの女房だったということは間違いない。その中宮大納言が、それこそ「中宮大納言」という名前のまま掲載されているわけだから、当該歌集の催しは、逆に永福門院の中宮時代に開かれたものと考えることができそうである。「女院小伝」などによると、永福門院は正応元年（一二八八）八月二十日に伏見天皇中宮となり、それから十年後の永仁六年（一二九八）八月二十一日に院号宣下されている。こうした永福門院の中宮在位期間と、先程の、為兼と為子に関する条件とを突き合わせてみると、問題の催しが開かれたのは、ほぼ正応二・三年頃から永仁六年八月二十一日までの、約九年間のうちのいずれ

かの時点であった、ということになる。もともと前述したとおり、為兼は永仁四年五月から自宅籠居を続けており、さらに永仁六年正月には佐渡へ流されてしまうので、このような催しは、そうした騒動以前に開かれていたと考えることもできそうである。その場合、開催時期は最大であと二年少々絞り込まれることになる。いずれにせよ開催時期と、当該歌集の成立時期とが、ほぼ正応・永仁年間に限られるという点については、おそらくは動かないものと思われる。

ところで岩佐氏は、その正応・永仁年間を、前期京極派の第一次模索期、またそれに先立つ弘安年間の、伏見院の春宮時代を揺籃期と定義されている。<sup>(16)</sup> うち揺籃期においては、伏見院近辺で文芸が非常に愛好されており、源氏物語などの古典撰取が盛んになされていたとい、<sup>(17)</sup> また続く第一次模索期には、京極派グループの各人が『為兼卿和歌抄』の主張を具現化すべく、試行錯誤を繰り返しながら、活発な和歌活動を繰り広げていたとい。<sup>(18)</sup> ただ残念なことに、その第一次模索期のもので現存している作品の数は、従来知られる範囲内では多くはなかった。当該歌集は、そのような空白をわずかながらも埋める資料として、また揺籃期からの流れを汲む、第一次模索期における具体的な古典撰取の様相を明らかにする資料として、位置づけることができそうである。

それにしても、古典作品の歌ではなくて詞書を引用し、そのシチュエーションに身を置いて、作者や登場人物たちになりかわり、自在に贈答歌を詠み合っていくなどという趣向は、少なくとも中世までの和歌作品では、おそらくはほかに例を見ないのではないだろうか。そのような特異な趣向を、京極派歌人がなぜ用いたのかという点については、今後さまざまな角度から検討していく必要がある。ただ現時点で一応考えられるのは、例えば『為兼卿和歌抄』に見られるような、京極派の歌論を具現化するための、それはひとつの手段だったのではないか、ということである。心の絶対尊重を説く『為兼卿和歌抄』には、定家の言説を肯定的に引用した、

中納言入道申しけるやうに、上陽人をも題にて詩をもつくり哥をもよまば、その才学をのみもとめてつゞけてよむうちにもよしあしおほけれど、ひとつわのうちなり。又それよりは心に入て、さはありつらむと思やりてよめるは、あはれもまさり、古哥の躰にも似也、猶ふかくなりては、やがて上陽人になりたる心ちして、なく／＼ふるさとをもこひしう思、雨をもき、あかし、あさゆふにつけてたへしのぶべき心ちもせざらむ所をも、能々なりかへりてみて、其心よりよまん哥こそ、あはれもふかくとをり、うちみる、まことにこたへたる所も侍べけれ、といふに、委心をかし。されば恋ノ哥をばひきかづきて、人の心にかはりてもなく／＼その心を思やりてよみけるとぞ。かやうにむかはぬ人の哥は、さは／＼とも、おもしろきやうなるはあれど、いかにぞ、いふのそひ、いきおひのふかき事はなくて、古哥にかはれる事也。

という一節がある。これを簡単にまとめれば、「上陽白髮人」という題で詩歌を詠む場合、何よりもその「上陽人」になりきることが大切であり、そうして心の底から詠むことによつて、初めてあるべき心の表現が生まれるのだ、といったあたりの内容となろう。このような『為兼卿和歌抄』の主張と、当該歌集の趣向とは、他の人物になりかわり、なりきつてその心を詠むという点で、何がしか通じ合うものを感じさせないだろうか。その意味において問題の、詞書の引用という特殊な行為は、彼らの歌論を実践するための、すなわちあるべき心を表現するための、一段ではなかつたか、と思われるわけである。当該歌集が第一次模索期の作品であるということも、そうした見方の傍証ぐらひにはなりそうである。

以上、本稿においては、当該本の基礎的な考察に終始した。今後、贈答歌そのものの内容と表現とを検討することによつて、京極派歌人の古典撰取の在り方を、より具体的に把握することができらうし、のみならず京極派歌風の形成過程の一端をも明らかにし得るかもしれない。ただ贈答歌の中には、どうにも意味の汲み取りにくい、難解な



ものも見出せるので、差し当たっては当該歌集の綿密な解釈から始めていく必要があるであろう。今後の課題としたい。

注

- (1) 『東京大学史料編纂所写真帳目録Ⅰ』（平成九年二月 東京大学史料編纂所編）。
  - (2) なお「写真帳目録」によれば、この写真帳の原本は個人蔵で、撮影は昭和四十六年に行われたという。ただその後、所蔵者の方は転居されてしまったらしく、いろいろと手を尽くしたものの、結局最後まで連絡を取ることができなかった。従って原本の所在も現在は不明、ということになる。所蔵者の方のご許可が得られないまま発表してしまうことには、やはりいささか躊躇いを覚えたが、しかし原本の撮影がなされた時点で、おそらく学術方面への提供も了承されていたのだろう、と一応判断することにして、とりあえず翻刻という形で取り上げてみる次第である。
  - (3) 『布留鏡』第一卷第三号・卷末付載の古筆家系図による。
  - (4) 『公卿輔任』永仁四年条・同六年条、及び『花園院宸記』正慶元年（一三三二）三月二十四日条などを参照。
  - (5) 井上宗雄『中世歌壇史の研究 南北朝期』（昭和四十年十一月初版、昭和六十二年五月改訂新版 明治書院）。以下井上説は同書より引用する。
  - (6) 岩佐美代子『京極派歌人一覧』（『京極派歌人の研究』所収 昭和四十九年四月 笠間書院）。
  - (7) 谷宏『永福門院に就いて——「中将」という御隠名——』（『歴史と国文学』昭和十七年八月号）。
  - (8) 伏見院・永福門院・為兼の順に掲げる。
- 〈伏見院〉
- ・ 国民精神文化研究所編『伏見天皇御製集』（昭和十八年 目黒書店）
  - ・ 次田香澄『京極派和歌の新資料とその意義』（『二松学舎大学論集』昭和三十七年度 昭和三十八年三月）
  - ・ 同『近時出現の広沢切卷子本及び断簡（伏見院筆宸筆御集）について——付・翻刻』（『日本文学研究』第二十一号 昭和五十七年一月）
  - ・ 同『広沢切攷——広沢切の現状と幾つかの問題（付・翻刻）』（『二松学舎大学論集』昭和五十八年度 昭和五十九年三月）

- ・同「広沢切の歌題、およびその考察」(『大東文化大学紀要』第二十三号(人文科学) 昭和六十年三月)
- ・同「伏見院の書跡と書風——付・新出の広沢切その他——」(『日本文学研究』第二十六号 昭和六十二年一月)
- ・同「広沢切(伏見院宸筆御集)における初句および末句の考察——付・広沢切初句索引」(『大東文化大学紀要』第二十五号(人文科学) 昭和六十三年三月)
- ・有吉保「『伏見院御集』冬部について——新資料「冬部百首」の翻刻を兼ねて——」(『語文』第八十輯 平成三年六月)
- 〔永福門院〕
- ・岩佐美代子「永福門院 その生と歌」(昭和五十一年五月 笠間書院)
- ・大野順一監修・小林守編「永福門院歌集・全句索引」(平成二年一月 私家版)
- 〔為兼〕
- ・岩佐美代子「京極為兼全歌集」(『京極派和歌の研究』所収 昭和六十二年十月 笠間書院)
- (9) 服部喜美子「建礼門院右京大夫集の本質と玉葉・風雅集」(『愛知県立女子大学・愛知県立女子短期大学紀要』第十二号 昭和三十六年十二月)。ただし次に掲出する十三代集入集状況一覧表は、『新編国歌大観』に基づき稿者が作成し直したものである。
- (10) 黒岩三由里「『玉葉和歌集』における、古典歌人としての和泉式部の役割」(『駒沢大学大学院国文学会 論叢』二十五 平成九年五月)。
- (11) 岩佐美代子「伏見院と永福門院——愛情生活と歌——」(『京極派歌人の研究』所収)。
- (12) 例えば五月二十七日条・七月五日条・八月十五日条・十一月三日条など。
- (13) 小林守「玉葉和歌集と探題和歌」(『明治大学日本文学』第二十二号 平成六年九月)。
- (14) 萩谷朴「平安朝歌合大成 増補新訂」第五卷(平成八年十二月 同朋舎出版)。以下萩谷説は同書より引用する。
- (15) 岩佐美代子「大宮院権中納言——若き日の従二位為子——」(森本元子氏編『和歌文学新論』所収 昭和五十七年五月 明治書院)。
- (16) 岩佐美代子「京極派作歌活動の時期区分」(『京極派歌人の研究』所収)。
- (17) 岩佐美代子「源具顕」(『京極派歌人の研究』所収)、同「伏見院宮廷の源氏物語——鎌倉末期の享受の様相——」(『古代文学論叢』第十四輯「源氏物語とその前後 研究と資料」所収 平成九年七月 武蔵野書院) など。

(18) 注(16)に同じ。

【付記】

本稿は、平成十二年度和歌文学会五月例会（於國學院大学）における口頭発表をまとめたものである。成稿までの間にいろいろとご教示下さった先学諸氏に御礼申し上げる。また当該本の複写・利用に際しては、東京大学史料編纂所よりご高配を賜った。記して深謝する次第である。なお本稿は、平成十二年度科学研究費補助金・奨励研究（A）「未詳歌集切の集成と研究」に基づく研究成果の一部である。